

「保育とデジタル」 指定討論

公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構／美晴幼稚園

東 重満

2020.09.26

東京大学CEDEP国際シンポジウム

私たちのジレンマや傍観者としての信念

日本の保育（幼児教育・保育）の実践においては

- 「環境を通して行う教育」を基本とし
直接的 情動（緒）的な体験（かかわり）を大切にしている
言い換えるならば
- 五感を働かせ自分のまわりの世界と相互交流する営みから獲得すること 意味をつくりだす過程で成長する事を大切にしてきた
- この保育における相互行為にデジタルツール（ICT）はなじむのか？
- その問いに対する回答に正面から向き合わず保育におけるデジタルツールのネガティブな側面にとらわれているのではないか

少し砕いてみると

- 五感（視覚 聴覚 嗅覚 味覚 触覚）と臨場感（空気感）に対してデジタルツールは視覚と聴覚にしかアクセスできないのではないか

さらに

- 「事実」の記録や再生はデジタル化された信号と再生機器によってリアルにアクセスできるが「意味の生成」や作り直しは乳幼児には困難（不可能）ではないか
- デジタルツールは子どもらしい非現実（ファンタジー）とのアクセスには不向きではないのか



- 子どもを情報の消費やゲーム等に支配される対象と化しはしないかという不安
- しかし 今とこれからの時代を生きる子どもたちにはデジタルツールとのコミュニケーションや利活用は回避できない事実がある

可能性をひらく窓（通路）として

“スローメーション” “泡の探索” の実践事例やそこにおける研究アプローチは 私たちのジレンマと信念（漠然とした不安や偏見）から生じる問いへの回答を多様かつ具体的に示すと共に 私たちが次のステップへ進む勇気を与えてくれた

→ 子どもは現実と非現実（ファンタジー）を自由に行き来できる存在である事を改めて気づかせてくれた

→ デジタルツールは子どもと実社会あるいは現実と非現実を「つなぐ」装置であり通路でもある事実を示唆している

→ 子どもは多種多様なかわりの過程で物語を紡ぎ自らも変容（成長）させる事ができる

問いかけ

- 保育者（教師）の保育計画に対する評価（活動と子ども成長のみとり）はどの様になされたか
- デジタルツールが保育者（現場）と保護者（家庭）をつなぐ役割を担っていたか
- デジタルツールは子どもを中心とした生態的なシステムを機能させるものとして期待できるだろうか